

# 3 在日コリアンと音楽・芸能 ——京都の民族まつりと教育をめぐって

## 1 外国につながる人々 ——在日コリアン

1910年から1945年ごろまでの間、韓国・朝鮮から多くの人々が日本に渡ってきました。その背景には、1910年の韓国併合以降、朝鮮総督府による土地調査事業による土地の没収や産米増殖計画があります。それによって韓国・朝鮮の人々は耕作地を失うことになり、仕事を求めて日本に渡ってきました。

一方、日中戦争後の戦時体制においては、労働力不足を補うために、韓国・朝鮮から多くの人々を日本に移動する計画も立てられました。韓国・朝鮮から日本に渡ってきた人々は、日本各地の炭鉱や飛行場、道路・ダムなどの仕事に従事することになりました。

戦後になると、韓国・朝鮮へ帰国した人々がいる一方で、約60万人の韓国・朝鮮人の人々が日本に残り生活するようになりました。その際に日本で生活するようになり定住した人々を在日コリアンと呼びます。ここでは、在日コリアンを用いますが、その他に在日朝鮮人、在日韓国・朝鮮人などいくつかの表現もあります。

戦中・戦後に韓国・朝鮮から渡ってきた1世の人々から数えると、現在の小・中学生の子どもたちは4世、5世になりました。世代が進むにしたがって、在日コリアンと日本人との間に誕生したダブルの子どもたちも増えている現状があります。こういう現状に基づいて、本稿では、国籍に係わらず、日本に暮らしながら韓国・朝鮮にルーツがあり、韓国・朝鮮人としての民族アイデンティティを維持している人々を在日コリアンと定義したいと思います。

日本の外国人人口をみると、戦後の外国人人口として最も多かったのは韓国・朝鮮の人々で

した。それは2005年ごろまで続きます。2024年2月の法務庁の調査によると外国籍を有する人々が300万人を越え、日本の総人口の約2%となりました。外国人人口の中で、最も多いのが中国、次にベトナムと続きます。韓国・朝鮮は、一見するとかつてより人口が減少したように思われます。しかし、日本へ帰化した人々も含めると今日も多く韓国・朝鮮につながる人々が日本で暮らしているはずで、その中で、在日コリアンの人々は、戦後の音楽をはじめとする文化のさまざまな側面に重要な影響を与えてきたのです。

## 2 在日コリアンと東九条マダン

日本には、いくつかのコリアタウンがあります。例えば、東京都新宿区新大久保、台東区東上野、大阪市生野区、川崎市浜町・桜本、京都市南区東九条などです。これらの地域には、在日コリアンが歴史的に多く暮らしてきました。

川崎市浜町・桜本の桜本商店街で「日本のまつり」というまつりが毎年11月に開催されています。「日本のまつり」では、韓国・朝鮮の芸能であるプンムルをその演目として取り入れ、地域の人々は楽器を鳴らしながら賑やかなパレードを行います。

京都市南区東九条にも在日コリアンの文化を中心としたまつり「東九条マダン」があります。毎年11月3日（文化の日）ごろに開催されています。2024年には32回を迎えます。毎年の来場者は3,500人を超えるととても賑やかなまつりです。現在の会場は閉校になった公立小学校の校庭で行われています。マダンとは、韓国語でひろばを意味します。パフォーマンスは、マダンパンというスペースで行われ、その周りを観客の人たちが囲み、来場した皆でまつりを盛り上げます。

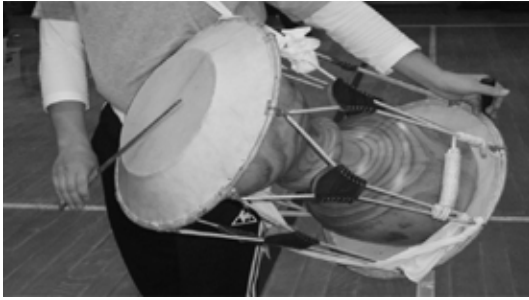


写真1 韓国・朝鮮の伝統楽器チャンゴ

東九条マダンの主な演目は、「大プンムル」「大サムルノリ」「マダン劇」「和太鼓&サムルノリ」などがあります。「大プンムル」「大サムルノリ」「和太鼓&サムルノリ」では、韓国・朝鮮の伝統楽器であるチャンゴ、プク、チン、ケンガリによるパフォーマンスがされます。当日は、演目だけではなく韓国・朝鮮の美術体験コーナー、夜間中学校などの各種展示、出店もあります。

大プンムルは、チャンゴやプクを身体につけて動きながら楽器を演奏します。大プンムルは地域の保育園に通う子どもから大人まで約100名近くの大勢でパフォーマンスします。大勢でのプンムルなので大プンムルなのです。大サムルノリも大プンムルと同じく大勢で演奏します。サムルノリは、「ヨンナムサムルノリ」という楽曲を演奏します。そもそもサムルノリは、伝統的なプンムルのリズムを舞台パフォーマンス用にアレンジした芸能です。これらの芸能をつくった金徳洙キムドクスらのグループ名を「サムルノリ」といいますが、その音楽も「サムルノリ」と呼ばれています。

### 3 チンティル 陳太一さんと東九条マダン

陳太一さんは、東九条マダンの元実行委員長で、現在東九条マダンの大プンムルや大サムルノリの楽器の指導を行っています。陳さんの出身は大阪市です。大阪市の中でも在日コリアンがとて多い地域に生まれました。小学生のとき人権教育が盛んな学校に転校し、同和教育や在日コリアンについて学ぶ機会がありました。

陳さんは、小学校、中学校と日本の名前（通称



写真2 東九条マダン

名)で学校に通っていました。中学3年の終わりに本名の陳太一を名乗ることに決めました。こうして陳さんは、ようやく韓国・朝鮮人として目覚めたときに家族が帰化を決めました。本名を名乗り自分の生き方を見つけたばかりだったのでとてもショックだったそうです。帰化が決まったのは陳さんが18歳のときです。そのとき陳さんは、「僕は日本人だ。朝鮮人を捨てて、全部捨てて日本人として生きていこう」と決意したそうです。

二十歳になり、陳さんは、京都の不動産会社に就職しました。ある日、在日コリアンの方が入居を申し込みに来ました。陳さんの上司は、「在日コリアンに部屋を貸したら部屋が臭くなる。家で焼き肉はするし、そういう方には貸せない」と言いました。そのとき、陳さんの中での何かが爆発し、強い怒りに近いものを感じたといいます。これをきっかけに陳さんは、京都で差別と闘う活動がしたいと思うようになりました。1980年代から90年代前半は、糾弾するような方法で差別解消をめざしていた傾向があったそうです。しかし、陳さんには、そういった方法がどうしてもしっくりこなかったそうです。

現在、陳さんは、東九条マダンで活動をしています。東九条マダンでは学校公演に行くこともあります。パフォーマンスを見たとき、子どもたちの目はとても輝くそうです。異国の文化、隣の国

の文化を間近で見るということは子どもたちにとって重要な意味があるのです。

陳さんは、陳さん自身にとってチャンゴがひとつの武器なのではないかと考えています。帰化した時は、朝鮮人であることを捨てたんだと思っていました。しかしその一方で、陳さんは、日本でどうやって生きていくかといったとき、やはり自分の立場を捨てずに生きていきたいと思っていたそうです。特に、入居差別を目の当たりにしたときからは、在日コリアンとして日本社会で生きていくということを決めたのです。そういう陳さんをいちばん表現することのできるツール、武器になるのがチャンゴなのです。

#### 4 東九条マダンについて思うこと

陳さんは、差別問題について拳を振り上げて闘うよりは、チャンゴを一緒にたたく方が良いと言います。東九条マダンに来る人たちには、「どうぞ一緒にたたきましょう」とそういう感覚でいるそうです。東九条マダンは、1993年から始まります。その大きなきっかけは、楽器を持っている色々な人と係わることがいちばん大事だと思ったからだそうです。

そもそも東九条マダンは在日コリアンも日本人も、子どもからからお年寄り、障がいのある人々もみんなマダンで一日楽しもうじゃないかというところから始まりました。東九条マダンに遊びに来た人たちは、楽器をたたけた、楽器を演奏する際の民族衣装を着てみた、朝鮮料理を食べられたというような体験をします。こうした経験がきっかけになってもう少し楽器をしたいとか、韓国・朝鮮の絵を描きたいとかそういった人たちが増えていってまつりが大きくなっていったのです。陳さんは、東九条マダンに来る人たちに「誰も拒まないです。皆さんウエルカムと一緒にやりましょう」と言います。

#### 5 京都市のコリアみんぞく教室

京都市の公立小学校の中には韓国・朝鮮の文化

を学ぶことのできる放課後の教室があります。そこで学んでいるのは韓国・朝鮮にルーツを持つ3年生から6年生の在日コリアン児童です。もともとは京都市内9校に設置されていましたが現在は2つの学校に「コリアみんぞく教室」（元民族学級）が設けられています。いずれも京都市の中でも在日コリアンが多く暮らす学区の小学校にあります。

コリアみんぞく教室は、植民地朝鮮から日本に渡ってきた人々が解放後祖国への帰国を見据え子どもたちに母国語を学ばせようと手作りの学校「母国語講習所」を作ったのが始まりです。今は世代を超え日本で暮らし続けている在日コリアンの子どもたちが韓国・朝鮮語や歴史、文化を学び自分自身について深く考えることのできる場所として存在しています。

キムキョンジャ  
金慶子さんは、「コリアみんぞく教室」のソンセンニム（韓国語で先生）です。東九条地域にあるコリアみんぞく教室の子どもたちにとって東九条マダンはお馴染みのまつりです。子どもたちは幼いころから東九条マダンに親しみ育ってきました。東九条マダンでチャンゴの演奏を親しむ児童や、タル（お面）や韓紙のちぎり絵などの作品を展示するなど子どもたちはさまざまな形でまつりに参加しています。子どもたちが暮らす地域に自身の存在をアピール、確認する場があるというのはとても素敵なことです。

コリアみんぞく教室の子どもたちにとってもう一つ欠かせない重要な発表の場があります。それは校内で行われる「学習発表会」です。この発表会には民族学級の時代からコリアみんぞく教室に名称が代わった後も単独で出演してきました。ある年、コリアみんぞく教室の児童数が少なかった年がありました。当時コリアみんぞく教室5年生児童がクラスの子どもたちに発表の手伝いを持ちかけたところ、「ずっと前から一緒にやってみかかった」と積極的な答えが返ってきました。休み時間に5年生数名が金さんのところに訪ねてきて「一緒に発表させてほしい」「クラス全員でできま



写真3 学習発表会の様子

すか？」と尋ねました。児童の姿に感銘を受けた金さんや担任はじめ教職員は子どもたちの期待にこたえ、コリアみんぞく教室の子どもと学年全員で発表を行うことになりました。

クラスとコリアみんぞく教室の子どもとの初めての合同発表のタイトルは「心一つに オルシグ チョッタ」に決定しました。「オルシグ チョッタ」というのはすごく楽しいときにかける掛け声のようなものなのです。学習発表会の内容は「タルチュン」（踊り）、次の年には和太鼓とチャンゴのコラボレーションにも挑戦しました。

金さんは、コリアみんぞく教室のある学校でこのような音楽体験、文化体験ができることに喜びを感じているそうです。子どもたちの心が動く出会いを積み重ね日々教育実践を行っています。金さんは、「子どもたちの笑顔は何にもかえられるものではない。子どもたちの心は純粋で本当に温かい。そして新しいものに対する興味がある」と言っています。正しく知ること、子どもたちの中に差別や偏見、そのようなものはなくなっていくということです。

## 6 在日コリアンと韓国・朝鮮の音楽

在日コリアンの人々、中でも韓国・朝鮮人としてのアイデンティティがある人々にとって、プンムル、サムルノリといった芸能は、ルーツを探り民族アイデンティティを形成するために意味があります。今日、在日コリアン4世、5世が誕生し

ています。時代を経てもなお、それらの芸能は受け継がれていくでしょう。伝承には韓国・朝鮮の芸能を師匠から弟子へつなげていく徒弟的な方法もあります。一方で東九条マダンのようにまつりや学校のような場で継承されることもあります。

地域のまつりや学校という場において、日本人の存在も欠かせません。それは、韓国・朝鮮の伝統芸能に魅力を感じ、在日コリアンの人々と一緒に文化を創造しようとする日本人です。在日コリアンの人々は、韓国・朝鮮の芸能を通してルーツを探求し自分を深く理解していきます。在日コリアンの人々が文化、そして伝統芸能を伝承することはとても重要なことです。

一方で日本人や日本で暮らすさまざまな人たちが在日コリアンと一緒に韓国・朝鮮の芸能に関わりパフォーマンスすることにも意味があります。なぜなら、在日コリアンと日本の文化が混ざり合い新たな文化が創造されることにつながっていくからです。このように、人々がいろいろな芸能と出会いそこに参加する営みは、自分を問い直し、考え方や価値観を更新するきっかけにもなるのです。こうした人々と芸能とのかかわりの可能性にも注目していくことが大切といえます。

### 【参考文献】

- 飯田剛史（2002）『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』世界思想社。  
植村幸生（1998）『韓国音楽探検』音楽之友社。  
洪里奈（2022）『「ルーツのある」子どもたち—民族学級という場所で』クレイン。

（磯田三津子）